

幽玄

題字

高秀秀信横浜市長

横浜能楽連盟

会報 No.17

平成11年6月5日

「祭り」を終えて



会長 新堀 豊彦

来たといわざるを得ません。

十一月三日の受賞式は、県民ホールで行なわれたのでありますが、岡崎県知事から賞状と副賞を授与された時の感激は、私にとりまして生涯忘れ得ぬ大きなものであり、連盟を維持し、横浜能楽堂をつくることが出来て、本当によかったという思いで万感胸に迫り言葉が出ない程でありました。

皆様の暖かい御協力、御支援により、昨年のわが横浜能楽連盟五十周年の記念事業のすべてがきわめて順調、かつ高い評価を得て終了したことを、連盟を代表して篤く御礼を申し上げる次第であります。

「横浜能楽大会」「第四十六回横浜能」そして記念出版「お能と横浜」。加えて、平成十年度の「神奈川文化賞」の受賞と重なり、それら全てをひっくり返すの十一月八日の祝賀パーティー（開洋亭）が盛大に行なわれるなど、まことに多彩な、充実した五十周年記念事業が展開出来、いずれも大成功であったことは、連盟の歴史に、さらに輝かしい実績を加えることが出



「神奈川文化賞」受賞を披露報告

この喜びと感動を、次の時代へと連続させることが、これからの私共の役割であり、次の世代を育て、横浜における能と謡曲の普及と発展を永遠のものにしていく、大きな責任を課せられたと思うて頂きたいのです。

私たちはひとつの山を登りつめたことは確かです。しかし、さらに大きな山や峰を休まず登り続けることに全力を上げる必要があるでしょう。

能や謡曲の素人の集まり、愛好者の団体である当連盟に、そんな難しい義務を背負わされるのは真平御免という考え方も当然あると思いますが、私たちはともかく、好きな道を極めながら、楽しみながら、日本の舞台芸術として、世界に類を見ない優れた美的探究に成功した能を、これからもより広く、深く大勢の人々に理解してもらい、同好の士を増やしていくことは絶対的な使命であるといわざるを得ないからであります。

五流がこのように仲良くスクラムを組んで、様々な試みを繰り広げることの大切さを、是非ともわが事として今後とも御協力を頂ければ幸いです。

次の大きな節目は、「第五十回横浜能」であります。今年四十七回を迎えるので、平成十四年が五十回になります。あと三

年です。この時の企画が当連盟にとって、大変重要なものになって参りますので、是非皆様のお知恵も拝借したい。今から十分検討し、現在望み得る最高の舞台が展開出来るようになることを夢見ております。

平成十一年度の定期総会開催

常務理事 鈴木 力雄
観世流

四月二十八日(木)、横浜能楽堂第二舞台で、平成十一年度の定期総会が開催された。高岡副会長の開会の辞に始まり、新堀会長挨拶、高井市民局文化担当理事の来賓祝辞の後、議長には浦部副会長が選任された。議長挨拶に続いて、議事録署名人が指名され、議案の審議が行なわれた。

第一号議案の十年度活動報告、決算報告、監査報告は、創立五十周年記念の各行事が無事終了したことを受けて、盛り沢山の内容となった。特に主催事業のうち、「横浜能」の開催時期は例年十一月であったが、各種行事と競合する時期であることを勘案して、第四十七回からは、九月に実施することとして準備作業を開始したこと、また、「五流合同横浜謡曲大会」と「五流交流横浜謡曲大会」が紛らわしいことから、それぞれを「横浜

能楽大会」、「五流交流のつどい」と名称を変更したことなどが報告された。

第二号の議案の十一年度活動計画案、予算案は、主催事業、後援事業、組織広報活動の強化を例年通りの内容で承認された。

第三号議案の役員の選任では、宝生流秋山尚、金春流土屋政雄、海謡会(観)平野元弘の各氏が常務理事に、観世流室屋澄雄氏が理事に推薦された旨報告があり、原案通り承認された。また、長年常務理事として当連盟の発展に貢献された田所義男氏が退任されたことに伴い、顧問になって頂いた旨報告された。

なお、四月一日現在の会員数は四八〇名で、出席会員は四八名、委任状提出は二三名であった。

「第二回五流交流のつどい」報告

常務理事 中島秀次郎
喜多流

横浜能楽堂が出来て、能や狂言の愛好者が急激に増えつつあることは周知の通りですが、その反面、自ら謡曲なり、仕舞なりのお稽古を始めようという方は、それ程増えて来ないという見方もあるようです。

連盟の新堀会長は伝統ある横浜の五流合同の、能楽に対する活動を維持していくために、

「お稽古する素人衆」の層の拡大を提唱して来られましたが、その施策の一つとして、平成十年二月に、横浜市共催という形で「五流交流横浜謡曲大会」が誕生しました。今年は第二回になりますので、名称をより親しみやすい「五流交流のつどい」に変更して、二月六日に開催致しました。

この会の主旨は、市への共催申請書に述べてあるように「現在、能楽連盟には入会していないが、会員の周辺で稽古に励んでいる人達に、横浜能楽堂という立派な発表の場を与え、今後の研鑽に一層の弾みをつけさせると共に、能楽愛好者として定着して行くように援助する」ということですが、素謡八番、連吟四番、仕舞十八番、一調一番という豪華な番組となり、実際に出演した人は女性九十二名、男性八十五名の多数にのぼりました。

時間は一応十二時〜午後五時までとしたため、私共の喜多流もそうでしたが、後で聞いてみると各流派とも出演希望を抑えるのに大変苦労をしたようです。そのため、三月十六日の反省会では、来年は午前十時から始めて、もっと沢山の方に出演していただくという意見が大勢を占めました。又、一調という高

級な演目が入っていることに若干異議があったようですが、私としては連盟の会員ではないけれど、是非一度横浜能楽堂に出演してみたいというベテランの方もおられるようなので、そういう方の出演を例外的に認め、クチコミでこの会の宣伝をして

いただくのも、主旨に沿ったよい方法ではないかと思っています。もう一つ、この会で予想に反してびっくりしたことは、見所が最後までかなり多くの人で埋められていたことで、まさに望外の喜びでありました。きつと見所におられた方は、来年は自分も出演してやろうと思っておられたのではないでしょう。是非、希望を夢に終わらせず、実現して下さるよう、少しでもお役に立てたらと願っています。



末筆になりましたが、御尽力下さった横浜市民局の皆様にご心より御礼申し上げます。

記念誌編集集でのコボレ話

常務理事 宝生流 秋山 尚

創立五十周年記念事業の一環として、記念誌出版の話が持ち上がったのは、平成九年五月であった。各流派より編集委員が一名選出されるも、新堀会長を除き本格的な出版物に取り組むのは初めての方々ばかりで、不安いっぱいの中でスタートとなった。

編集の過程では、オヤ?と思う事や、以外に知られていない事柄、出版作業、並びに工程等々、について勉強することが多くあり、大変に有意義であった。振り返って二、三ウラ話を披露してみたい。

(1) 小生の先師、故高橋徳之師(松本長師の直系)より、昔話としては「観梅戦争」の故事を耳にはしていたが、具体的には何のことかさっぱり判らぬままであった。今回山崎館長の原稿で年代的なもの、当時の家元の状況が記載されており、ようやく先師の話が理解できた。更にはやはり高橋師に關係の深い、虚子や観山(遠縁)に触れられてあり先師を通して、各々の巨匠が

身近に感じられ大いに感激した。

(2) 能楽連盟の初代会長、中村桃山師(本名源兵衛)の資料収集に当たっては、意外に見つからず八方手をつくした。偶々、能楽堂の書架で藤井義良著『坂戸金剛流残影』を垣間見ることがあり、著者は、かつて桃山師の弟子であったと書かれていた。実は藤井氏は小生の会社の先輩であり、早速に連絡を取り、桃山師の情報を得た。又、観世流の藤井氏が、なぜ金剛流についてのも著書を残したかの経緯についても承る。縁は異なるもので、これを契機に旧交を温めることとなった。(藤井氏は「謡曲歌かるた」「俳句と謡曲」等も上梓している。)

(3) 西先生にお願いした「六浦」「放下僧」の記事に載せる写真撮影で称名寺を訪れた。曲に由来する青楓は既に無く、か細い桜の木に変わっていた。何年前か前までは子孫らしき楓があった筈と聞いている。又、駒札(標札)による案内板もあった。旧跡を是非、復活して頂ける事を願うばかりである。「放下僧」の瀬戸神社には駒札の案内板もあり、六浦瀉を背景にした仇討ちの場面など、想像すれば時の針が逆戻りしてもおかしくはない。

(4) スタートから約一年半の時

間があり十分と想っていたら、素人の悲しさで最後は秒読みとなってしまう。原稿の上がり具合、各種段取り(座談会、関係者面談等)、校正読み合わせ、写真の選択等々、ハラハラのし通しとなる。執筆者の熱意と、挿入写真の増加で全体のボリュームが膨らみ、原価のアップに加え、引き取り部数の増加要請があり、かなり慌てる場面もあった。幸い皆さんの協力で予定どおりに捌けている。

最後に、今回の出版に際しては、横浜能楽堂からの物心両面に亘る御支援に厚く御礼を申し上げます。特に担当の大林係長には骨身(途中足の怪我あり)を惜しまぬ御協力に対し更めて感謝致します。

謡と私

金春流 土屋 政雄
春巳会

私の現在の師匠である守屋泰利先生は、先代与四巳師の息子さんで、私は先代時代、昭和四十一年四十二歳の時、図らずも謡を習うことになった。先生はその当時各事業場等に出張指導し、金春流謡曲の普及に務めておられた頃、私の会社に来られて多くの先輩同輩を教えていた。そんな時彼等に誘われてなんと

なく入った。勿論謡のなんたるかも知らずにである。その当時、会社の隣の郵便局の二階の座敷を借りての練習で、一週間に一回一時間程の指導であった。弟子は十名程で、習い始めの頃、調子や節が難しいという印象であった。謡本を見て国語好きの私は親しみを感じ、高砂の一節に「四海波静かにて国も治まる時つ風。枝を鳴らさぬ御代なれや……」という調子の魅力に引き込まれた。謡本に使われている記号は独特なので、夫々少しずつ調子が違っていることを理解し、大事を感じて大事に扱う事が大切だと教えられた。とかく仕舞や能に目を奪われがちであるが、謡曲愛好者は全国に数百万いると知らされて意を強くした。謡は一人で楽しめるという魅力もあって、今日のカラオケブームと同じである。私より少し後と同じ会社の岩田さんがこの世界に入り、今日まで続いている。

私は五年後転動して、再び謡曲の世界に入ったのは、なんと十七年後であった。サラリーマン生活から解放されたので、早速謡を本格的に習う事にした。先生の門を叩き、平成元年七十歳を過ぎてお元気な師の指導を受けた。

謡は健康作りに良いといわれ

て熱が入った。そして、平成二年に久良岐舞台で独吟を演ずる事になった。田村の一節を選んだが、発表する日が近づくにつれ不安が強くなったが、なんといっても練習であるといわれて数多く練習に励んだものである。当日早めに新調の紋付袴に着替えさせてもらってから落ち着いて来た。わずか五分程の独吟であったが、なんとか大過なく謡うことが出来た。もっと声を大きくという点が反省点であった。



その後、道成寺等の難曲に挑みなんとかこなして来たが、全体の調子を把握するのは大変である。先生はその後体調を崩され、平成六年に他界された。その時、既に息子さんの泰利先生

は立派な能楽師として活躍しておられたので、そのまま謡を続けることが出来た。そして二回目の独吟を謡う機会に恵まれた。親子二代の先生の教えを受けての謡いである。平成九年十一月、喜多六平太記念能楽堂で、曲は「駒の段」であった。今回は前回の轍を踏まぬ努力をしたが、練習不足で十分な結果を出す事が出来なかった。一にも二にも練習が大切と肝に銘じた次第である。

それぞれの「隅田川」

喜多流 馬場 洋一
洋議会

平成十年夏、我々洋謡会のメンバーはいつもと違う青い表紙の稽古本を手にして、軽い興奮を覚えていた。

師の友枝昭世先生が、横浜能楽連盟創立五十周年記念第四十六回横浜能で演じられる「隅田川」を、二週間後に予定されている「海謡会例会」で我々も謡おうということになった。練習を積んだうえで先生の能を拝見しようという趣旨だった。

秋も深まった平成十年十一月八日土曜日、「横浜能」二日目、喜多流の日である。開演三十分前に客席はほぼ埋った。栗谷菊先生の舞囃子「高砂」が始まる。

仕舞は金春流、金剛流に続いて喜多流は三人の先生が舞われた。出雲康雅先生の「田村」、栗谷能夫先生の「松風」、内田安信先生の「船弁慶」が観客を魅了した。泉流の狂言「鐘の音」のあと小休止、いよいよ能「隅田川」である。客席は小休止のさわめきと、お目当ての「隅田川」を待つ緊張感に包まれていた。

待ちに待った「隅田川」が始まる。ワキの渡し守は森常好先生、地謡は栗谷菊先生はじめ喜多流のそうそうたる方々。

友枝昭世先生が演じられる物狂女がさらわれた息子梅若丸を探して舞台に現れ、物語は展開していく。客席にしわぶき一つない。

我々はいつもにも増して真剣に舞台に集中し、稽古本片手の者もいる。本にも目をやりながら、友枝先生を見つめ聞き入る。

圧巻は梅若丸の亡霊が塚から現れ、母の悲しさと、絶望感を友枝先生が表現されたときであった。我々だけでなく初めて能を見た連れも目頭を押さえた。

谷大作先生のご子息、五歳の谷友矩くんの演じた子方は素晴らしく、練習を積む我々に感動を与えてくれた。三十分も前から塚の中に入り、出番を待つ間に眠ってしまう、後見の谷先生

があわてて起こされた、と開演亭での能楽連盟創立五十周年祝賀会の席で伺った。

素晴らしい舞台上に圧倒され、「隅田川」は悲しい物語なので拍手はしてはいけないといわれていたのも忘れ、つられて拍手をしてしまった。

二週間後、いよいよ我々の素謡「隅田川」本番の日である。

いつも直前の特訓で例会を乗り切ってきた、あまり練習熱心でない我々であるが、素晴らしい「お手本」を見せていただいた後だけに燃えた。

謡い終え、情景にあった謡い方ができたと思ひ満足。子方を務めた「洋謡会」の方のスペース「ヤリスト？」吉田さんは谷友矩くんのおかげで一層磨きがかかったことはいうまでもない。

友枝昭世先生に感謝。そして幼い先生にも感謝。

会員の声

去年の事

梅若会 堀内万紗子

昨年は大忙しの年でした。五流一派の先生方御出演による横浜能が脈々と続いて五十年、先人方のご意志を引き継いで新堀会長をはじめ役員達のたゆまざる働きが続く中、盛り沢山の催

しが組まれました。

まず、二月七日の五流の集い第一回が始まり、恒例の年二回の幽玄の発刊、七月十一日・十二日の能楽大会、「お能と横浜」の記念出版、ここに県の文化賞授賞が入りますが、十一月七日・八日の横浜能、そして最後を締めくくるパーティーとなる訳ですが、神奈川文化賞につきましては大変に印象的な事がございました。私はパーティー係でしたので、九月に入って度々能楽堂の事務室で準備の為のお仕事をしていた所、会長が入っていらして「堀内さん、大変です。連盟が県の文化賞を頂く事になりました」と何時にも増した笑顔での御発言、「おめでとうございます」と申し上げましたが、十一月三日文化の日

の授賞の式典に私も参列させて頂き、その賞の重み、なかなか頂けないプレゼント、会長の喜びもひとしおでいらした事を感じ入った次第でございます。

パーティ係はまず、招待状の表書きから始まり、数人の梅若の役員の協力を得まして、一人約百枚を書きあげました。そのお返事の結果、大勢の方々の御出席が決まり、またまたお料理の追加、会場がこれでは狭いのでと広く、椅子を沢山用意して、勿論お酒もたっぷり、とホテル側と度々打ち合わせを重ね、十一月八日六時、緊張の中、パーティーは始まりまして、NHKの山田アナの司会で準備されたマニユアル通り、あたかも謡本を一枚一枚めくるが如く進行され、どなたも、こなたも「もとより薬の酒なれば、酔いにも侵されず」のお顔で三〇〇名の大パーティーは、めでたく華やかに終了しました。



腹から声を出して謡うこと

梅若会
梅宏会 間庭 愛信

声はのどからでなく腹から出して謡うのは当り前のことなので、いままさらこんなことをと思われるでしょう。しかし長くお稽古をしていながう、私にはな

かなか体得できないことでした。肩に力が入って力み、のどから無理に声を出して力強く謡っているつもりでした。

それが、梅若恭行先生に「腹を出して謡うでしょう。そうではなく腹をひっこめるのです」と一言教えられて、やっと少しは腹から声を出せるようになったのです。不自然に謡っていたのを恥ずかしく思います。

それでも「木曾」の願書を謡う時に、力を入れる余り目が廻るようでした。自然に力強く謡うためには、お稽古の積み重ね以外にありません。

先生にどんなに感謝申し上げても足りない程、ありがたく思っています。

能楽堂だより

七月・九月の公演

横浜能楽堂では、以下の通り公演、講座を開催します。

「第十七回普及公演」七月三十一日(土)午後二時。能「班女」

(観世流) 本月孚行、狂言「名取川」(大蔵流) 善竹十郎。正

面三千五百円、脇正面三千円、中正面・二階二千五百円。チケ

ット発売は、六月二十日(日)窓口で午後二時から。電話予約は

午後二時三十分から。「第十八回普及公演」八月二十

九日(日)午後四時。狂言「寝音曲」(大蔵流) 茂山千作、狂言

「灌ぎ川」(大蔵流) 茂山七五三、狂言「鬪罪人」(大蔵流)

茂山千五郎。正面三千五百円、脇正面三千円、中正面・二階二

千五百円。チケット発売は、七月十八日(日)窓口で午後二時か

ら。電話予約は午後二時三十分から。

「開館三周年記念公演」九月二十三日(木・祝)午後二時。能

「殺生石」女体(金剛流) 広田隆一、狂言「文蔵」(大蔵流)

山本則直。正面五千円、脇正面三千五百円、中正面・二階三千

円。チケット発売は、八月二十一日(土)窓口で午後二時から。

電話予約は午後二時三十分から発売。

お問い合わせ・お申し込みは(二六三)三〇五五。

第四十七回横浜能予告

第四十七回横浜能は次の通り番組が内定しました。皆様お誘い合わせで観賞ください。

日時 初日 九月四日(土)

二日目 九月五日(日)

会場 横浜能楽堂

番組(初日)

仕舞・観世流

喜多流

狂言 宝生流

狂言 萩大名

能 弱法師

狂言 三宅右近

能 観世恭秀

狂言 観世流梅若会

仕舞 金春流

狂言 素袍落

能 小鍛冶貞

善竹十郎

金剛永謹

編集後記

▽昨年は大忙しの年でした。連盟五十周年の記念事業は、三〇〇名が参加した祝賀パーティーをしめくりに終わりました。

▽神奈川文化賞の受賞は、次の世代を育て能楽の更なる普及、愛好者を増やすと云う連盟の使命を果たす第一にしたいものです。

▽各流のご協力をいただき原稿の集まりがよく一部割愛させていただきました。(MS記)

横浜能楽連盟 連絡先

●文書郵送又はFAXの場合
〒233-0013 横浜港南区丸山台二丁目

FAX 一九一七 新堀方

●電話の場合
FAX 〇四五―八四四―二九〇三

横浜能楽堂 遠藤れな

TEL 〇四五―二六三―三〇五〇